

「有田と鹿島の焼物交流史」

日時：令和2年1月26日

場所：エイブル3階 研修室

講師：鈴木 由紀夫さん

(佐賀県立九州陶磁文化館館長)



▲鈴木由紀夫さん

私は鹿島で生まれて、有田に勤めておりますけど、10年近くは鹿島から有田に通いました。鹿島と有田はそんなに深い関係はないと思っていましたが、歴史を紐解いていくと、結構つながりがありました。

今日は江戸時代の古文書の記録と、物的証拠である窯跡から出てくる物を通じて歴史の世界に浸っていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

最初に江戸時代の行政区を見てみたいと思います。『資料1』は、武雄市図書館・歴史資料館が展覧会をされた時に作られた地図です。色が付いているところが「江戸時代の佐賀県」です。現在太良町の南の方は長崎県になっておりますが、江戸時代の佐賀県は意外と広がったということが、これを見ると分かります。平戸藩と大村藩を見ると、佐賀藩のように細々とは分かれていません。佐賀藩は行政区が細々と分かれている、というのが特徴だろうと思います。それが多様な焼き物が生まれる原因にもなっていくんです。

有田で採れた原料は、隣の武雄にも配給されなかったし、鹿島にも、吉田にも配給されませんでした。唐津藩は論外ですね。大村藩にも絶対に渡さなかったんですね。それで、自分の領地の原料を使って一生懸命工夫して焼き物を作ようになります。武雄は有田のような白い原料が採れませんでした。同じ佐賀県の中でも違う焼き物が生まれるんですね。そこが面白いところで、佐賀県の焼き物の特徴の一つだと思います。



▲資料1
『武雄-鍋島家・温泉・やきもの』展図録から

次の『佐賀県・長崎県の登り窯跡』の地図は、小さくて見えにくいですが、黒丸が、唐津焼のように茶色っぽい焼き物を焼いた窯跡です。白丸が、有田焼のように白くて硬い焼き物を焼いた窯跡です。見ると、「点」が佐賀県の左側に集中しているのがわかります。原料が採れた地区が、佐賀県の西の方に多かったからではないかと、漠然と思っております。佐賀県の右側の窯業地は、北茂安町の「白石焼(しろいしやき)」くらいしか無いんです。

佐賀県を代表する焼き物としては、唐津焼があります。北波多という所に、岸岳という山がありますけど、そこで始まったと言われております。今から430年ぐらい前です。唐津港から出荷したので「唐津焼」と呼ばれたんですね。それは、有田焼のように白い焼き物ではありません。

有田は佐賀本藩領ですが、飛び地のように佐賀市からは離れております。ここでできた有



田焼は、伊万里港から出荷したので、消費地では「有田焼」と呼ばずに「伊万里焼」と呼んだんです。その辺がまた、名前のややこしいところです。

この地図の窯跡数は、佐賀県の文化財課の資料を参考にして作りましたが、唐津の登り窯跡が23で、唐津焼の産地にしては意外と数が少ないなと思ったんです。それには事情がありました。現在の伊万里市南波多町の辺りは、江戸時代は唐津藩だったんです。だから、現在の行政区の中で窯跡を数えると、唐津市は23しかありませんけど、江戸時代のカウントでいうと、南波多の30くらいをプラスして、50くらいにはなるということです。有田には、82の古い登り窯の跡があります。

実は、佐賀県の中で窯跡がいちばん多いのは武雄で、87もあるんです。武雄の学校の子供たちを連れた先生が「佐賀県の焼き物の勉強

強に来ました」と言われるんですけど、「武雄は佐賀県で窯跡がいちばん多いんですよ」と言うと「ああ、そうですか!」と驚かれます。「地元の事をもう少し調べて、ぜひ、郷土の歴史に関心を持ってください」と言ったことがあります。

あとは、嬉野が20窯跡あります。窯跡が多いほどたくさん作られたというふうに、一般的には思っているかと思います。

大村藩の波佐見に窯跡が36あります。有田に次いで磁器の窯業地として盛んだったわけです。三川内の方には33の窯跡があって、この中には平戸の2つの窯跡も含まれています。

実は、いま話した窯業地が、数年前に日本遺産に認定されました。『日本磁器のふるさと肥前』という名称で、唐津市、伊万里市、武雄市、嬉野市、有田町と長崎県の波佐見町、平戸市、佐世保市(三川内)の8市町が認定されました。唐津焼は土物ですが、有田焼のルーツの先行する場所として選ばれています。

では鹿島はどうか?と見てみますと、窯跡1になっています。これは数え方の問題で、登り窯の数から言うと、明治まで入れれば5つ6つはありますよ。時代が変わると、皿山の中で別の窯ができたりしますので、数え方によりけりです。移動した分まで入れると鹿島は6つ7つくらいあったはずですよ。これも県への報告の基準の違いで、ひとつになってしまっているんで、なんとなく残念だなと思います。鹿島の窯業が2、3か所でも続いているならば、日本遺産に入れてくれたかも知れませんね。

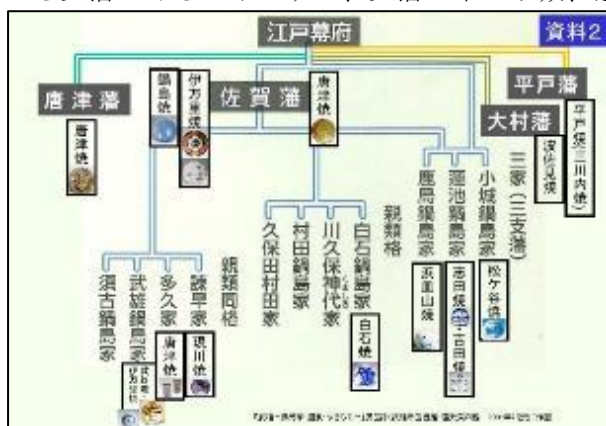
それから、茶色い焼き物は山の土で火に耐えるものを上手にブレンドすれば大抵できるんですよ。ただ白くて硬い焼き物だけは、その辺にある土でできるということにはなりません。1300℃近くまで温度を上げて、形を保って、光を透すような素材はそんなにありません。

武雄にも、有田の金ヶ江三兵衛(李参平さん)と同じように朝鮮の陶工が入って、有田と同じ頃に焼き物を始めたんです。ところが、白い良い原料が無かったんですね。「武雄焼の祖」と言われる「深海宗伝(ふかみそうでん)」という人がいますが、その人が亡くなったら、奥さんは一族を引き連れて、有田に移住しました。そして、李参平と一緒に有田焼の歴史を作りました。有田の原料は優れていて、鍋島本藩が管理した良い原料だったんですね。

しかし有田の周りの地区は、本藩から原料を分けてもらえなかったんで、どうしたかとい

うと、天草から原料を買っていました。江戸時代、300年以上前からですね。それで、有田と同じような白い焼き物ができるようになって、浜の皿山も焼き物が始まったということになります。

『資料2』は、江戸時代の佐賀藩の支配の形態ですね。序列としては江戸幕府があって、その下に外様としての佐賀藩があって、その下の方に血筋の繋がった息子たちによって始まる支藩があるわけですが、支藩の中に小城、蓮池、鹿島があります。



▲資料2『武雄-鍋島家・温泉・やきもの』展図録 を元に作図

それから直接の息子たちではありませんが、親類として白石(しらいし)鍋島家、川久保神代(くましろ)家、村田鍋島家、久保田村田家があります。

親類同格というのは元々地元の有力者で、鍋島藩に仕えるようになった家系です。武雄は後藤という地元の領主がおりましたが、名前をあとで鍋島に変えています。それから親類同格の多久や武雄も、自立はしているわけですが、当主は大抵佐賀本藩の家老になって、代々仕えています。

唐津は幕府寄りの全く別の藩です。国家公務員のような殿様が十年、数十年ごとに交代して勤務していたところです。外様の藩が、へんな動きをしないように監視も兼ねて、国家公務員型の藩主が来ています。だから、唐津は「〇〇家」という言い方はあまりしません。例えば佐賀藩でしたら鍋島藩とも言いますが、唐津の場合は寺沢があったり、土井があったり、小笠原があったり、いろいろ名前が変わるので一族の名前を冠した「〇〇藩」という名前は使いにくいわけです。

このような中で、焼き物が始まっていきます。有田で焼き物が始まった時には、まだ磁器の原料を見つけていなかったもので、唐津焼のような茶色い焼き物ができたんです。有田で陶器ができたわけですけど、有田の陶器のことを、一般的には唐津焼と呼ぶんですね。唐津焼は唐津でできた焼き物だけではなくて、肥前でできた土物(陶器)を全部「唐津」と呼んだので、「有田の唐津焼」という、変な言い方になります。

有田で陶石が見つかったから、磁器の有田焼ができるんですけど、伊万里から出荷したので、「伊万里焼」という名前で商品になったんですね。

将軍家へ献上するために作ったのが「鍋島焼」です。原料は同じものですけど、優秀な陶工を引き抜いて作らせています。非売品で特別の献上用にしか使われないので、「有田焼」とか「伊万里焼」とは区別をします。こういうのが本藩の特産品だったわけです。

多久は家老の領地でしたけど、陶器の原料がありましたから、唐津焼を多久で作りました。

武雄は、磁器の原料はほとんど無かったので、磁器は少しだけ作りました。土物の原料はいっぱいありましたので陶器は沢山できました。江戸時代に、武雄の焼き物がなんと呼ばれたかという、陶器は「唐津焼」と呼ばれ、磁器物は「伊万里焼」と呼ばれました。武雄の焼き物は、名前上は無い、ということになるんです。武雄は、87も窯跡があったのに、「伊万里焼」と「唐津焼」に含まれていたわけですね。

古い武雄の焼き物を武雄の名誉のために収集されたのが、中島宏先生です。江戸時代の武雄の古陶磁を約600点集めて、亡くなられる前に、全部九州陶磁文化館にいただきました。敬意を表して、ここでは「武雄焼」と書いておりますが、江戸時代はこれらは「唐津焼」と

しか呼ばれていません。

蓮池鍋島家の方を見ると、「志田焼」とありますが、ここは塩田です。これも特産品で相当作られています。「吉田焼」というのは、嬉野の吉田焼で現在まで繋がっています。しかし、当時のブランド名としては一括して「伊万里焼」で売られていました。

小城の殿様も自前で焼き物が欲しかったんでしょうね。「松ヶ谷焼」とありますが、長くは続きませんでした。諫早も元禄の頃に「現川（うつつがわ）焼」という唐津焼のような優れた焼き物を作りました。

そして、1720年代に入って、我が鹿島の「浜皿山焼」が始まります。この頃は天草の原料が手に入ったし、技術者は有田から回してもらえればなんとかなります。志田や吉田にも陶工がいました。話がつけば、原料は手に入るから有明海沿いに窯場を作ることができます。鹿島の藩主が自前で作ろうということを考えられたのではないですかね。

東の方の白石焼は、地元の原料と天草の土を混ぜて磁器を作りました。やっぱり白くて硬い焼き物の方が産業としては発展したんですね。土物の唐津焼は有田焼が始まると、衰退しはじめて、磁器より安い製品か、甕か、すり鉢か、という需要になりました。

一方、波佐見焼は磁器ですから大いに発展しました。平戸も天草の原料を使うようになってから、格段に品質が上がって、量は少ないですけど有田よりもむしろ高品質な物もできたんですね。これが江戸時代の肥前の窯業の実態です。

明治17年に、浜の皿山の窯元の惣代の岩永さんと戸長の乗田さんが役所に提出した資料があります。この中に享保年間第5代当主鍋島直堅（なおかた）公の時代に、焼き物が始まったということが書かれています。しかし、天保8年（1837年）には飢饉のため販路が全く閉塞し、殆ど廃業に傾こうとすると書いてあります。皆さんは日本史で「天保の飢饉」について習われたと思うんですけど、「江戸の四大飢饉」と言って寛永と享保と天明と天保があります。天明は富士山の噴火で農作物がまったく穫れなくなった大飢饉です。天保は天保8年以前からいろんな農作物ができなくなって、日本中が非常に不安定な状況になりました。経済もほとんど衰退してしまうような大変な時代ですけど、これは別に浜皿山だけではなくて、日本全体のいろんな産業が苦しい時代であったわけです。そういうのを乗り越えて歴史が続いてきた、ということが書いてあります。

また、原料の土石産地は、肥後国天草郡深江村産出の陶石と書いてあって、浜皿山の焼物の原料が天草のものだったということが分かります。そして、焼き物の生産の過程など、いろいろ書いてあり、よく読むと非常に面白い文書です。「水臼に硬い石を搗（つ）かせた」とかですね。皿山には小川しかありません。どうやって硬い石を砕くと思いますか。今は機械で砕くんですけど、当時は大きい川があるところは水車で砕きます。水量が多いところはグルグル回して、そこに歯車を付けて杵で搗いて、杵の先に、鉄の頭を付けておけば、それが当たって硬い石も粉になるんですね。

浜皿山のように1メートルもないぐらいの小川ではどうするのか。唐臼とか水臼というのがありますが、シーソーのような原理です。シーソーの少し大きいのを作って、先の方に杵を付けて、その先に鉄の頭を付けておきます。片方をくり抜いて空洞にしておけば、そこに山水がチョロチョロ流れて溜まります。溜まって重くなったら、杵の方が上がりますよね。そして、溜まった水が流れ出たら、反対側の杵をつけた方が下がります。その時、ゴンと搗くんですよ。そしてまた、反対側に水が溜まるまで、しばらく待っていないといけません。悠長ですが、電気代は要りません。そして一晩中仕事してくれます。専門業者の方に聞くと、電気でガタガタと搗いたら熱を持つらしいです。熱を持ったら、せっかくの粘土の組成の可塑性が無くなる傾向にあるようです。だから、ゆっくり悠長にゴンと搗いたほうが丁度いいんです。昔と言っても馬鹿にできませんね。

山の斜面に築く登り窯は、30年から40年で作り替えるんですけど、浜皿山の場合は、登

り窯はひとつだけで、部屋数は10個ほどありました。普通、登り窯の1部屋を1窯元で使うので、10軒ばかりの窯元があったということになります。また、釉薬は五島からと書いています。主力製品は「奈良茶碗」といって、奈良漬のお茶漬を食べるのに使うような茶碗です。いわゆる小型の「飯碗」を作っていたということですね。

1796年に書かれた『近国焼物山大概書上帳』という資料がありますが、これは天草の庄屋上田家の当主が記録したものです。天草の陶石を全国に出荷しており、あちらこちらに出かけて、調査報告をしています。よくこんな所まで行ったなと思うくらい現地を回っておられるようです。その資料の中に鹿島の浜皿山についての記述があります。一度衰退した浜皿山がもう一度再興されて間もなくの頃です。使っている原料は「天草土」とありますが、陶石で納品されています。

佐賀本藩領の有田の記述のところには、原料は「地土」と書いてあります。「地土」とは、その土地の土、つまり泉山の原料を使ったということです。上田家から原料は買ってないということですね。製品のところに「南京焼之上品」と書いてあります。「有田焼」とも「伊万里焼」とも書いてないですよ。中国では、焼き物を景德鎮から南京まで運んで、そこから船で揚子江を下りました。だから日本では、景德鎮の焼き物は、「景德鎮焼」と言わずに「南京焼」と呼んだんです。「有田焼」や「伊万里焼」の名称が全国に行き渡っているのにもかかわらず、白い硬い焼き物は「南京焼」と呼ばれていた。少なくとも天草の人は「南京焼」と呼んでいました。

鹿島の浜皿山は「南京焼之中品」になっています。客観的に見て、有田より品質は落ちるかなというところですね。でも、大村領の焼物よりは良かったようですね。



続いて、「資料4」を見ながら、焼き物の名称に触れていきたいと思います。唐津焼は、唐津港から出たので「唐津焼」と呼ばれた、とよく言いますが、それも証拠はありません。唐津焼が始まったのが、有田焼より20年から30年前です。土物は、朝鮮から登り窯の大量生産の技術が入りました。備前や瀬戸はもう作っていましたが、大量生産が可能になったので唐津港からいっぱい出たとい

うことです。武雄にも土物があるし、有田でも最初は土物を作っていたんですが、肥前でできたものの土物は、皆「唐津焼」になってしまったんですね。

有田の人は有田焼のことを何と呼んでいたかということ、名前は無いと思いますよ。「陶器」か「焼きもん(物)」としか言っていないと思います。

ここがややこしいところで「伊万里港から出たので伊万里焼」と言いますが、浜皿山の焼き物を伊万里まで持っていくはずないですよ。浜の港からでしょう。重たい焼き物はみんな船で運びます。どう考えてもいちばん近い港からのはずですね。波佐見焼は、川棚か彼杵の港からだだと思います。

実は、早岐の護岸工事現場から有田焼などの焼き物がたくさん出たんですよ。商人は、自分が積み出しやすいところから出したということでしょうね。発掘調査と古文書と突き合わせていけば、歴史が解ってくると思います。では、吉田焼はどこから出荷したかということ、多分、塩田川まで持って行って、有明海から出たんだと思いますけど、伊万里からも出たと

いうことになっています。

さらにややこしいのは、「有田焼」と「伊万里焼」と「古伊万里」の名称です。明治30年に鉄道が通って、有田の焼き物を伊万里まで運ばずに、直接出荷するようになりました。そうしたら消費地の方で自然と「有田焼」と呼ぶようになったんです。私の職場に来る観光客の方が「有田焼と伊万里焼と古伊万里はどう違うのか？」と言われますが、作られた場所は「有田」ですよ。ある時、有田の人が古伊万里ではなく「古有田」と呼ぼうと言いました。でも定着しませんでした。武雄は、土物は唐津焼、磁器物は伊万里焼と言っていました。現在、武雄には80軒近くの窯元があります。武雄の観光協会が「武雄で焼き物ができているのを誰も知らないのはおかしい」と言って「武雄焼」という幟を作りました。今は、そういう産地主義の時代になってきているようです。

整理しますと、「唐津焼」「古唐津」は、江戸時代の肥前陶器の総称で、「伊万里焼」「古伊万里」は、江戸時代の肥前磁器の総称です。

では、鹿島の殿様は有田焼をなんと呼んだのか。佐賀大学が祐徳稲荷神社所蔵の文書を研究しておられますが、そのおかげでいろいろ分かってきました。

延宝三年(1675年)、京都の公家で日野弘資(ひのひろすけ)という人が鹿島藩第4代藩主の直條公(なおえだこう)に手紙を書いておられますが、その手紙の中に有田焼香炉がありがとうというお礼の言葉がありました。京都では普通「伊万里焼」としか呼んでいないことになっていますが、「有田焼」とははっきりと書いてあります。これが鹿島の藩主とのやりとりの中で有田焼という名前が出てくる最初です。

また、『有田町史』の陶業編を見てみると、元禄元年(1688年)の鹿島藩の江戸藩邸の日記の中に「香炉有田焼皿等」という記述があります。鹿島の役所の文書の中でも、有田焼と呼んでいるんですね。鹿島から有田までは陸路ですね。鹿島の人にとって、伊万里は伊万里、有田は有田。伊万里焼と呼ぶには、やっぱり違和感があるんですよ。

それからもう一つ、『有田町史』に面白い記述があります。元禄11年(1698年)の鹿島藩の江戸日記に、吉良上野介より唐冠の形をした香炉が欲しいと言われて、有田に問い合わせたら無かったので、獅子型の香炉をやったというものです。吉良上野介といえば、赤穂浪士の討ち入りですよ。赤穂浪士の討ち入りは元禄15年(1703年)です。その4年前に「有田焼の香炉が欲しい」と鹿島の藩主におねだりをしている。それを受けて、有田まで探しに行っていたんですね。

この頃の鹿島藩は、江戸でいろんな方に頼まれて、有田焼を贈っていた。そして、自前で作ったらどうかと藩主が思ったようですね。プレゼントだけでなく、産業としても収益があるので、「うちでも作ろうか」って。「援助はするから、だれか作らないか？」と言って、民間にさせるわけです。

浜皿山で陶器の製造が始まったのは享保6年(1721年)と言われていています。この頃、嬉野の吉田皿屋では、すでに天草から原料を取り寄せて、磁器を製作しています。鹿島もそうしようかということで、天草から原料を取り寄せて始められました。

『皿山代官旧記覚書』という有田に関する古文書がありますが、大抵は犯罪の記録が記されています。その中に、安永4年(1775年)、浜の壱騎峠に陶器製造所が造られたという記録が残っています。そして、安永5年には壱騎峠の焼物場所再興のために、有田から職人を雇ったと書いてあります。初めて浜皿山で焼き物を作ってから50年後。50年の間には、技術の問題とか販路の問題もあったのかもしれない。

ではなぜ、浜皿山に窯を築いたのか。はっきりとは分かりませんが、窯を築くのにはちょうどいい傾斜があったことと製品を浜の港から出せたこと。そして、川や燃料となる松の木もいっぱいあった。そういう事情があったのではと思います。

再興するときに、細工職人の万太郎という人と絵書きの彦兵衛という二人、有田焼を作っていた職人を、藩の許可を得て雇っています。3月ごろに申請を出して「8月15日まで」という了解を取っています。

その翌年の安永6年(1777年)のことが事件として記録されています。「有田の内山に住む細工人数十人が浜皿山に行っているようだから、調べないといけない」というような内容です。有田の職人が罰せられるのをわかったうえで来ていたということです。有田にいても給料はそれなりで待遇も良かったと思いますが、もしかしたら、前年の8月15日まで浜皿山で仕事をした細工人たちから、何かいい話を聞いたのかもしれませんが。これがバレそうになって「調べ”が来るから、早く戻れ」と言って戻ったんでしょうか。結局、調べには至らなかったと書いてあります。

また江戸時代には、有田と鹿島を行き来するのも距離があって、あまり縁は無かろうと思っていたんですが、焼き物屋さん同士の結婚の親戚関係って結構あるんですね。

浜皿山の窯を再興してから5,6年経った頃の話です。佐賀藩の役所が、有田の泉山の絵書き虎五郎という人に文書を出しています。「貴方は鹿島の浜皿山の窯焼(窯元)嘉平次の娘さんと結婚しているでしょ」と。どんな縁談話があったか知りませんが、本藩と支藩の関係で、窯業地同士の繋がりがやっぱりあるんですね。結婚はいいんですけど、その奥さんが有田で病気になって、浜の実家に帰ってしまいました。虎五郎さんはその見舞いによく行っていたんですが、藩からは「浜では絵付けの仕事をしてはいけない」と言われていました。自分の奥さんのお父さんが窯元だったら、ただ飯を食べるわけにもいかないし、仕事をしますよ。でも、絵付けの仕事はしたらいけないという規則になっている。それで、絵付けをした罪に問われたけど、藩主の奥様(寿綱院)の四九日法事に際して罪が免じられたとの記録があります。この『皿山代官旧記覚書』も読んでいたら人間ドラマがあって、面白いですね。

実は、この浜皿山を二十数年前に九州陶磁文化館で発掘調査したんですよ。登り窯のあったところは現在、道路の下になってしまいました。

そこに窯があったかどうかの判断は、製品の欠片だけではできません。煉瓦みたいに赤く焼けた土や塊があると、窯があったという証拠になります。また窯道具が出てきたら、窯場があったことが分かります。浜皿山では「ハマ」が出てきました。「ハマ」とは、碗などを焼くときに下に敷く台のことです。この「ハマ」に乗せて焼くと、収縮のときのひび割れを防ぐので、現代でも使っています。「脚付きハマ」というのは、三か所に脚が付いています。

製品を重ね積みして焼くときに使いますが。

鹿島の窯場は、明治8年では、浜皿山、野島、久保山、中尾、鮎越の5か所もありました。登り窯が一つずつあったとしても最低五つですね。どんな物を作ったかといったら「茶漬け碗」です。これは飯碗のような小さなお碗です。それから「煎茶碗」も主力商品でした。

明治16年の資料によると、生産額は佐賀県で浜が第4位ですよ。1位が有田で、2位が吉田、3位が塩田です。浜は上位の方ですよ。

明治8年の鹿島の焼物

窯場

浜皿山
野島
久保山
中尾
鮎越

(『鹿島市史 中巻』p.506)

製品

奈良茶碗 60組
茶漬け碗 48,000個
鉢 50個
皿 60個
燗瓶 50本
煎茶碗 3,000個
井 50個

(『鹿島市史 中巻』p.500)

『肥前陶磁史考』という本に、文久2年(1862年)に岩永幸一が天草の原料を用いて磁器を焼き始めたとあります。この人の作品が残っていて、コレクターの方に写真を撮らせてもらいました。

「Koichi IWANAGA」と書いてあります。大徳利で、絵具からするとコバルトの顔料だから明治だろうと思います。これは胴が35センチくらいある立派なものです。



大正9年ごろは朝鮮向けのサバル(井)を作っていました。大量に輸出していますが、一番作ったのは吉田皿屋です。鹿島と吉田は、このサバルを沢山作りました。国内向けは、重箱とか奈良茶碗。そういうふうにして、鹿島の窯業は昭和まで続いたんですね。

初代 松本 佩山



絵付け中の佩山 昭和25年6月



ハミ作り中の佩山 昭和25年6月

戦中戦後はどこでもそうですけど、企業の統制令がかかって合併したり廃業させられたりしました。戦争をきっかけに廃業した所も残念ながらあります。

有田出身の松本佩山(はいざん)という人がいましたが、私は九州で最初の陶芸家とっております。「陶芸家」というのは「職人ではない」という意味です。帝展(現在でいう日展)に、京都より西側で初めて唯一入選した偉大な陶芸家です。この陶芸家が鹿島に来てくれたんですね。佩山さん

は大酒飲みで、戦前矢野酒造の当主に「ウチに来ませんか?酒はいくらでも飲ませますよ」と言われて、鹿島に来られたらしいです。

佩山さんは、明治28年に有田で生まれました。昭和7年頃から「佩山」と名乗っています。佩山(はいざん)というのはどんな意味が分かりますか?腰につける刀の事を「佩刀」と言います。佩山とは「山を腰に付ける」と言う意味です。「有田皿山」を自分の腰に付けて引っ張って行くという壮大なスケールの方ですね。

佩山さんは昭和8年以降、帝展に何回も入選しています。そして、昭和20年矢野平八さんの招きで鹿島に移住します。矢野酒造の工場内に赤絵窯を築いて、のちに白山陶器のデザイナーとなる森正洋さんが弟子入りして、3年間仕事を一緒にされています。佩山さんはその後、昭和35年に有田に戻られましたが、翌年亡くなりました。

昭和25年の佩山さんの作品に、染付で左向きの馬を描いた湯呑があります。「左馬」というのは「窯が倒れないように」という初窯に入れる縁起ものです。



佩山さんは「鹿島焼」という名前が使われたときがありました。残念ながら「鹿島焼」が定着する前に、有田に戻ってしまわれたんですが。この皿は有明海の濁土を使った焼き物です。それだけだと軟らかすぎるので、蟻尾山の堤の底土と浜の砂土を調合したらしいです。この作品の箱に「佐嘉彌窯(さかやがま)佩山作」と書いてあるんです。矢野酒屋にお世話になっているからですね。洒落っ気があって、面白い方だったんだなあと思います。

これは、浜皿山で採取された皿です。群青色が濃いのは、明治時代の製品だと思ってください。こういうのは明治3年以降、ドイツから入ってきた顔料を使っています。手描きではなくて、刷り込んだ物です。この辺が定番の商品だったと思います。それから、朝鮮向けの「サパール」と言っ



▲「サパール」を紹介する鈴木さん

ついていますね。

て、模様が無いですよ。これは、吉田と鹿島でたくさん作っています。

碓子(がいし)も作っていますね。これは、藤津碓子に繋がるものです。藤津碓子が鹿島にあるということは、やっぱり窯業の繋がりでですね。

これは湯呑ですかね。窯の中でたくさん焼けるように、「天秤積み」にしてあったのが、倒れて、ひっくり返ってくっ



今日は、江戸時代から鹿島と有田はいろんな繋がりがあったことを知ってもらえたかと思えます。それぞれの時代で、果たすべき社会的な役割を果たして現在に至っています。また、焼き物の歴史を掘り起こすと、吉良上野介のような歴史に残る人物にも繋がることがあるんだということも感じていただけたと思います。どうも御清聴ありがとうございました。